世界名作劇場

プリンセス
小公女セーラ

『おお、この子だ！』

第 44 話

提供　ハウス食品工業

制作　日本アニメーション
　　　フジテレビ

脚本　中西隆三

登場キャラクター（第四十四話「おお、この子だ！」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ベッキー
ラビニア
クリスフォード
ラム・ダス
カーマイケル
カーマイケル夫人
ドナルド

ジャネット
（ロッティ）
（アーメンガード）
（モリー）
（ジェームス）

エミリー（人形）
シーザー（猫）
ハリジャン（サル）
ボリス（犬）

1 ミンチン女学院・全景（朝）

小雪が舞い、屋根屋根が白く覆われている——

何処からか教会の鐘の音——

2 同・屋根裏部屋（朝）

ベッドで眠っていたセーラ、ふっと眼をさまし、起上る——

セーラ「そうだわ……私はまたこのミンチン学院に戻って来ていたんだわ」

見廻したセーラ、気がつく——

セーラ「いけない……昨夜書いて置いておいた手紙を確かめてみなくては……」

セーラ、上等な毛布を脱け出ると、テーブルに行く。

テーブルの上に、置かれた筈の手紙がなくなっている
——
セーラ「矢っ張り、なくなっているわ」
セーラ、急いで壁に行くと、ノックする。
セーラ「ベッキー！……ベッキー！」

3

同・ベッキーの部屋（朝）

同じ上等毛布で眠っていたベッキーが、ガバとはね起きる——

ベッキー「は、はい、ただいま！」
途端に、ドッとベッドから転げ落ちる。

4

同・屋根裏部屋（朝）

ベッキーの声「あいたたた……」

セーラ「ベッキー……」

ベッキーの声「いいえ、大丈夫でございます。ただいま……」

セーラ、ほっと微笑で首をすくめる。

ドアに、ノックの音――続いて寝間着のままのベッキーが入って来る。

ベッキー「お早うございます、お嬢様！」

セーラ「お早う、ベッキー」

ベッキー「どうなりまして？　魔法使いさんへのお手紙……」

セーラ「見て！……この通りなくなってるわ」

ベッキー、セーラの指すテーブルを見る。

ベッキー「まあ……では、矢張り、昨夜のうちに、魔法使いさんがお手紙を受取って……」

セーラ「（微笑）ええ……きっと今頃、あの方の所に届いているに違いないわ」

5

クリスフォード家・居間（朝）

暖炉の前に――手紙を載せて来たビロード・クッションを捧げ立つラム・ダスと、前に、ボリスを脇に、車椅子でセーラの手紙を読み続けているクリスフォードの姿。

そのクリスフォードの持つ手紙が拡大し、セーラの声がかぶる――

セーラの声「……このようなお手紙を差上げることは、ご自身の深い恵みを秘密になさって来られたあなた様には、きっとご迷惑な事かも知れません……でも、今もう私は、心からのお礼を申さずにはいられないのです……長い間、いつも心傷つき、寒さにふるえ、おなかをすかせて来た私とベッキーに、すばらしい幸せを届けて下さったあなた様に、せめて感謝の一言（ひとこと）を申上げることを

お許し下さい……有難うございました、そしてお身体を大切に、と……屋根裏の少女より……まだ見ぬ親切な魔法のお友達へ……」

恋文を読み終るように、凝然と手紙を読了するクリスフォード、低く呟く。

クリスフォード「素晴らしい手紙だ……それに、この少女が、これ程、私の気持を読み取ってくれていようとは……」

ラム・ダス、頷く――

クリスフォード「ラムダス……」

ラムダス「は……」

クリスフォード「私は今、ひどく混乱しているのだ」

ラムダス、怪訝に見る――

クリスフォード「カーマイケル弁護士に、パリまで探しにやらせたラルフ・クルーの娘が、もし私が心に描くような優しい娘でなかったとしたら……」

じっと見るラムダス

クリスフォード、吐息して続ける。

クリスフォード「……それでも、私は、その娘に、親切な魔法使いである事が出来るだろうか、と……」

ラムダス、凝然と見守る

クリスフォード「判ってくれ、ラムダス……正直云って、私は今、ラルフ・クルーの娘と会う事が恐いのだ……いや、心の一部では、その娘が見つかってくれない方がいいとさえ思っていたのかも知れん……」

ラムダス「御主人様……」

クリスフォード、悲し気に首を振る。

クリスフォード「判っている……また私の心の病いだよ……」

クリスフォード、低く吐息する

クリスフォード「きっと私は、お前から聞いている隣りの屋根裏の、優しく気の毒な少女に、探しているラルフの娘の

イメージを、勝手に重ねようとして来たのだ……
そうだとも。私は、二人が同じ一人の少女だったら、どんなに嬉しい事だろう、と、そんな馬鹿気た幻想すら抱き続けて来たのだよ」

ラムダス、凝然――

クリストフォード「だが、その馬鹿気た幻想も、間もなく、カーマイケル弁護士が連れて来るラルフの娘が、うちこわしてくれる事だろう……ラムダス、港への迎えを頼むぞ」

ラムダス「はい……程なくカーマイケルご一家も馬車で見える筈でございますので……」

クリストフォード、頷く――

6 同・表

同・表降り続ける小雪。

馬車が走り着き、ドナルドに続いて、ジャネットとカーマイケル夫人が降り立つ。

ぱっと玄関へ駆けて行くドナルド——

ジャネット「ドナルド！」

夫　人「気をつけて！」

ドナルド「大丈夫だよ！　早く早く！」

ドナルド、玄関口へ駆け上ると、のび上って呼鈴を押す——

ドアが開き、ラムダスが顔を見せる。

ドナルド「あ、こんにちは、ラムダスさん！」

ラムダス「やあ……お待ちしていましたよ。さ、どうぞ」

7

同・玄関ホール

入って来るドナルド、ジャネット、カーマイケル夫人、ラムダスに促されて、奥へ――

8 同・居間

ラムダスがドアを開け、ドナルド、ジャネット、カーマイケル夫人が入る。

ドナルド「こんにちは、クリスフォードさん」

ジャネット「ドナルドったら！……ごきげんいかがですかって、そう云うのよ」

夫　人「まあまあ、二人とも……」

クリスフォード「はっはっは、ドナルドにジャネット、よく来てくれたね。君たちが来ててくれると、私も元気になれるよ」

ドナルド「でしょっ……だから、ぼく、今日は、本当は、港までパ

パをお迎えに行きたいんだけど、お姉さんと一緒に、ここでクリスフォードさんのお相手する事にしたんだよ」

ジャネット「ドナルドったら！」

クリスフォード「はっはっは、そりゃ二人とも御苦労さんだったな……では、迎えの方は、あなたとラムダスに願うとするかな」

夫　人「（微笑）承知致しましたわ……じゃ、あなた方もおとなしく待っているのよ」

ドナルド「うん、大丈夫だよ」

ラムダス「では……」

頷くカーマイケル夫人——

9　同・表

玄関から出て来るラムダスとカーマイケル夫人——

馬車に乗り込むと走り出る。

10 同・居間

出窓で、その馬車を見送っていたドナルドが、クリスフォードと、傍に控えているジャネットの所へ跳ね戻って来る。

ドナルド「ね、クリスフォードさん……パパがパリから連れて来る女の子って、どんな子だと思います？」

クリスフォード「ふむ、こりゃ難しい質問だな」

ジャネット「ドナルド！……そんな事聞くものではないわ」

ドナルド「だって、ぼく、どうせお友達になるなら、あのマッチ売りの少女みたいな優しい人がいいもの」

クリスフォード「ほう、マッチ売りの少女などに知り合いがいるのかね」

ドナルド「ええ、前から知ってるとっても可哀想な女の子なんです」
ジャネット「お父様もお母様も亡くなったとかですけど、ママのお話だと、相当お育ちが良かったに違いないんですって」
クリスフォード「ほう……」
ドナルド「その子がね、この間馬車で通ったら、雪の中でマッチ売りをしてたんです。それでぼく、マッチを買ってあげたんですよ」
クリスフォード「ほほう、それは感心な事をしてあげたな……で、そのマッチ売りの少女とかは、なんと云う名前なんだね」
ドナルド「それが、判らないんです」
クリスフォード「ほう……では、住んでいる所は？」
ジャネット「それも判らないんです」
クリスフォード「判らない？」
ドナルド「ええ、あれからもう一度、馬車で同じ所を通ったんです

けど、その時はもう別の女の子がマッチを売っていて……」

クリスフォード「ふうむ……」

ドナルド「ぼく達、心配してるんです。あの女の子に、なにか変った事が起っちゃったんじゃないかって」

クリスフォード「成程……」

11

ミンチン女学院・屋根裏部屋

ミンチン女学院・屋根裏部屋燃えている暖炉の火。

ベッキーが石炭を更にたきつけている。

傍に、読みさしの厚い本を開いたセーラ。

セーラ「有難う、ベッキー……とても温くなったわ」

ベッキー、振返って肩をすくめる。

ベッキー「フフ……おかしいんですよ。モリーさんもジェームスさ

んも……院長先生に云われたとかで、お嬢様のこのお部屋には、充分に石炭をたくように、ですって」

セーラ「まあ……」

ベッキー「みんな、お天気でも変るみたいに、急にお嬢様に対する態度が変ってしまって……きっとあの魔法使いさんからの小包のおかげですわ」

セーラ「（微笑）そうかも知れないわ」

ベッキー「でも、よかったですわね。この雪では、暖炉の火なしじゃ、それこそ凍えてしまう所でしたもの」

何気なく天窓を見上げたセーラとベッキー、はっと気がつく。

× × ×

雪の積った天窓の外に――動く影がある。

× × ×

セーラ「まあ……あそこになにかいるわ」

ベッキー「ええ。なんだか猫みたいですわ……まさか、シーザーが
　　　　独りでに外へ……」
セーラ「いいえ、ネコじゃないわ……そうだわ、もしかしたら、あ
　　　のハリジャンよ！」
ベッキー「なんですって？」
セーラ「ベッキー、手伝って！」
ベッキー「はい、はい、お嬢様……」
　　二人、急いで椅子をテーブルの上にあげると、セーラ
　　がその上にのぼる。
　　心配気に椅子を押えるベッキー――
　　×　　　×　　　×
　　セーラ、そっと天窓を押し開ける。
　　降り積った雪の中に――キイキイ鳴きながら震えて
　　いるハリジャン。
セーラ「まあ、矢っ張り、あなただったのね……さ、いらっしゃい」

セーラ、手を差しのべる——
ためらったが、一瞬、セーラの胸に飛び移って来るハリジャン——
セーラ、抱きしめる——

セーラ「可哀想に……こんなに冷え切っているわ」
ベッキーが、心配そうにのび上る。

ベッキー「また逃げ出して来たんでしょうか」
セーラ、ハリジャンを抱いたまま、隣家の屋根裏の窓に呼びかける——

セーラ「ラムダスさん！……ラムダスさん！……またハリジャンが逃げて来てますよ！」

× × ×

だが、隣家の天窓は、半ば開いたまま誰も姿を現わさない。

× × ×

セーラ「お留守なんだわ……それで、このハリジャンが逃げ出したんだわ」
ベッキー「そうそう、そう云えば、先刻、お隣から馬車が出て行くのが見えましたですが」
セーラ「まあ……困ったわね、どうしよう」
ベッキー「お嬢様、とに角、お猿を温めてやりませんと」
セーラ「ええ……」
セーラ、天窓を閉めると、ハリジャンを抱いて、椅子を降り、ベッキーと一緒に暖炉の前に来ると、ハリジャンを温める。
セーラ「さ、もう大丈夫、温まるのよ」
おとなしくなるハリジャン――
ベッキー「お嬢様、一体どうなさいます」
セーラ「いいわ、あとで私が、表から返しにうかがうわ」
ベッキー「そんな！……もし、この学院の中で、お猿を抱えて歩い

てる所でも見つかってごらんなさいまし。院長先生にどんなめに逢うか、判りませんですよ！」

セーラ「そうね……困ったわ！　ほんとに」

暗然となるセーラとベッキー――

（中　C　M）

12 クリスフォード家・表

雪の中を——帰って来る馬車。

13 同・居間

出窓で表を見ていたドナルドが叫ぶ。

ドナルド「あ、パパたちの馬車が帰って来たよ！」

ジャネット「えッ」

ドナルド「（振向く）ぼく、お出迎えに行って来ます！」

ぱっとドアへ走る——

ジャネット「あ、待ってよ、ドナルド！」

クリスフォードの車椅子の傍にいたジャネットも、慌てて追う——

クリスフォード「はっはっは……慌てなくても、女の子は逃げたり

はせんぞ」

微笑で見送ったドアが、バタンと閉される——

クリスフォード「やれやれ……」

急に、孤独の中で重苦しく呟く。

クリスフォード「ラルフの娘か……」

クリスフォード、じっと眼を閉じる——

突然、ドアが開き、ドナルドが飛び込んで来る——

ドナルド「ク、クリスフォードさん！」

クリスフォード、静かに眼を開ける。

ドナルド「あのォ……あのォ……」

困惑して立尽すドナルド—— 続いて入って来るジャネット、背後をかえり見る。

更に、手荷物を持って入って来るカーマイケル夫人と、大型トランクを提げたラムダス——

そして最後に、旅装のカーマイケルが入って来て、立

つ――

カーマイケル「パリより……ただ今戻りました……」

じっと見返すクリスフォード――

カーマイケルの背後で、ドア外のインド人がゆっくりとドアを閉す――他に連れて来た人物はいない事が歴然となる。

カーマイケル、静かに夫人を見返る。

カーマイケル「お前たちは、退っていておくれ」

夫　人「は、はい……」

夫人、ドナルドとジャネットを促すと、別の一方のドアを出て行く――

見送ってクリスフォードに向直るカーマイケル――

カーマイケル「実は、お詫び申さねばならぬ事が起りまして……」

凝然と見るクリスフォード――

カーマイケル「先日、パリより、ラルフ・クルー氏のお嬢さんが見

つかった事、及び、そのお嬢さんを連れ帰る旨、手紙で御報告致しましたが、帰国直前になって……」

クリスフォード「（低く）人違いだったのかね」

カーマイケル「はい……パリ新聞に出した尋ね人の欄を見て、財産目あての連中が仕組んだ事だと判りまして……」

クリスフォード、無言で顔をそむける。

カーマイケル「それまでにも、パリ中の寄宿学校を探し尽したのですが、残念ながら、クルー氏のお嬢さんに該当する女生徒は、発見出来なかったのです……」

クリスフォード「覚悟はしていたよ……カーマイケル君……覚悟は……」

眼を閉じ、静かに吐息する――

カーマイケル「ク、クリスフォードさん！」

急いで傍に寄るラムダスとカーマイケル。

クリスフォード、眼を閉じた儘、微かに首を横に振る

クリスフォード「大丈夫だ……私の神経は、まだ耐えられる……多分、こうなる事を予想していた為だろう……こうなる事を……」

——

茫然と見るラムダスとカーマイケル——

14

ミンチン女学院・屋根裏部屋

暖炉の前で、ハリジャンを抱いているセーラ——ノックの音に、はっと振返る。

セーラ「は、はい……」

ドアが開き、野菜籠とショールを手にしたベッキーがすべり込んで来る。

ベッキー「さ、お嬢様、お猿をこの篭に入れて、私のショールで隠すんでございます」

セーラ「ありがとう、ベッキー……」

15 同・三階の廊下

眠っていたシーザーが、気配に起上る。
屋根裏部屋へのドアが開き、野菜篭を抱えたベッキーと、その上を覆ったショールを押えたセーラが出て来る。
忽ち、鳴きながらのっそり近づくシーザー。
ベッキー「シィッ、シッシッ！」
セーラ「お願い、シーザー、騒がないで！」
二人、階段口へ――続くシーザー。

16 同・一階の階段

降りて来るセーラとベッキー、シーザー。
遊戯室からオルガンの音が聞えている。
ベッキー「ほら、今なら大丈夫でございます」
セーラ「え、ええ……」

17 同・遊戯室

アメリアのオルガンが終り、本を頭に乗せた女生徒たちが立停る。
アメリア「ごめんなさい、ラビニアさん。私のお部屋から、楽譜を取って来て下さる？」
ラビニア「はい、アメリア先生……」

18 同・院長室前の廊下

そっと来るセーラとベッキー、ビクッと立停る――

院長室から聞えるミンチンの咳払い。

19 同・院長室

デスクで帳簿を調べているミンチン。

20 同・院長室前の廊下

足音を殺して、忍び過ぎるセーラとベッキー。

21 同・一階廊下

出て来たラビニア、はっと立停る。

×　　　　　×　　　　　×

22 同・台　所

野菜篭を押えたセーラとベッキーが、そっと地下への階段に消えるのが見える。

×　　　×　　　×

見送って、急いで二階への階段へ走るラビニア――

炉の前で、それぞれ椅子にかけたモリーとジェームスが、大口で舟をこいでいる。

×　　　×　　　×

廊下から、窺ってそっと切れるセーラとベッキーの姿

――

23 同・使用階段の下

降りつける雨――出て来るベッキー、セーラに野菜籠を渡す。
ベッキー「さ、もう大丈夫でございます」
セーラ「有難う、ベッキー」
ベッキー「では、魔法使いさんによろしく」
セーラ、微笑で頷くと階段を昇り出す。

24 同・二階の廊下

張出窓で、じっと見降しているラビニア。
×　×　×
眼下を――使用人階段を上って来たセーラが、雪の中を隣家へ向うのが見える。
×　×　×
その姿をラビニアが凝然と見送っている。

25

クリスフォード家・居間

クリスフォード家・居間燃える暖炉の火。
凝然とその炎をみつめているクリスフォード――
その傍に、心配気に立つカーマイケルと、少し離れて
見守るラムダス――

カーマイケル「クリスフォードさん……」
クリスフォード、石のように動かない。
カーマイケル「実は、フランスからの船の中で、ずっと考えていた
事があるのです」
クリスフォード、無言――
カーマイケル「我々は、亡くなったクルー氏の奥さんがフランス人
だったと云う事を手掛りに、パリを探して来た訳で
すが、もう一つ、重大な手掛りを忘れていたのでは
ないかと……」

クリスフォード、凝然――

カーマイケル「そうです……クルー氏が生れた、このロンドンですよ……改めて、ロンドンの学校を探して見るのです」

クリスフォード、静かにカーマイケルに顔を向ける。

カーマイケル「ロンドンには、沢山の寄宿学校があります……そう……そう云えば、この隣りも、寄宿学校でしたね」

クリスフォード「そうだ……隣りには……今、私の心を大きく占めている少女がいる」

カーマイケル「なんですって？」

クリスフォード「だが、その少女は、生徒ではない……貧しい、カゲリのある、メイド代りの少女だ……あのラルフ・クルーの娘などでは、とうていあり得ない子なのだ……残念な事だがね」

カーマイケル「成程、そうだったのですか」

その時、玄関の呼鈴が鳴る――

はっと見るクリスフォード、カーマイケル、ラムダス
――

26

同・玄関ホール

奥から出て来るインド人の使用人二人。
ドアに来て開ける――
雪を背に――野菜篭を押えて立っているセーラ。
セーラ「あ、突然おうかがいして……実は、こちらのお猿が、私の
屋根裏部屋に逃げて来たので……」
老若のインド人使用人、言葉が判らずに顔を見合せて、
肩をすくめ合う。
セーラ「あ、言葉が通じないのね……そうだわ」
セーラ、思い切って叫ぶ――
セーラ「ナマステ！」

二　人「(微笑) オウ、ナマステ！」

その時、奥から声が走る――

声　「あッ……君じゃないか！」

はっと見るセーラ――

奥から、ドナルドが飛び出して来る。続いて、ジャネットとカーマイケル夫人。

セーラ「まあ……あなたは……」

ドナルド「驚いたなあ、一体どうしてこの家へ……」

その時、ドナルド達の後ろから出て来るラムダス――

ラムダス「こ、これは、お隣りの屋根裏の……」

セーラ「ラムダスさん！……今、そちらの窓から逃げて来たハリジャンをお届けに……」

ラムダス「なんですと？！」

一瞬、セーラの抱えていた野菜籠から、ショールをはねのけて飛び出したハリジャンが、ぱっとラムダスの

胸にとびつく。

ラムダス「ハリジャン！」

愕然となるドナルド、ジャネット、カーマイケル夫人たち――

27 同・居間

飛び込んで来るドナルド――

ドナルド「パパ、大変だよ！……ぼくの知ってるマッチ売りの女の子って、ラムダスさんの知ってるお隣りの人だったんだ！」

カーマイケル「なんだって？」

ドナルド「それに、その子、インド語を知ってるんだよ」

クリスフォード「なんだと？」

その時、入って来るジャネットとカーマイケル夫人、

続いて猿を肩にラムダス。

ラムダス「御主人様……お隣りの屋根裏に住む例の方が、お見えになっています……お会いして、是非今までのお礼を申されたいとかで……」

クリスフォード「通して呉れ給え！　今、すぐにだ！」

ラムダス「承知致しました」

ラムダス、振返る――

インド人使用人に案内されたセーラが入って来ると静かに一礼する――

セーラ「はじめまして。クリスフォードさま……あれ程ご親切を頂きながら、こんな形で突然おうかがいした事を、どうかお許し下さい」

カーマイケル、思わず夫人に囁く。

カーマイケル「立派な挨拶だ。とてもメイド代りとは思えん」

夫　人「ほんとに……」

クリスフォード、静かにセーラに答える。

クリスフォード「私の方こそ、丁重な手紙を頂いたお礼を申さねばなるまい……所で、君は、インドの言葉を知っているそうだが」

セーラ「はい。挨拶だけは……ずっとインドに住んでおりましたから」

クリスフォード「イ、インドに……」

激しい戦慄がクリスフォードを襲う――

クリスフォード「カ、カーマイケル君、私には聞けん、君が聞いてくれ給え……この子の名前をだ」

カーマイケル「君の名前は？」

セーラ「セーラです……セーラ・クルーです」

クリスフォード「こ、この子だ」

呻くように云うと、車椅子から立上る。

クリスフォード「この子が、ラルフの娘だったんだ！」

茫然と立尽すセーラ――

（第四十四話　終）